

# たどつのもかし

Vol. 21 令和元年5.20 発行

日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～ 北前船寄港地・船主集落 ～」に追加認定されました!!



金毘羅参詣絵図

去る5月13日に多度津町が日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～ 北前船寄港地・船主集落 ～」に追加認定されました。北前船の寄港地であることと、金毘羅街道への接続点であることが評価の対象となりました。

多度津は古代の多度郡の港、さらに室町時代に細川家家臣香川氏の拠点港でもありました。江戸時代、元禄7年に多度津京極藩となり、江戸時代後期、天保9年に整備された多度津港<sup>たんぼ</sup>によって港として更なる発展をします。

金毘羅参詣名所図会には多度津のことを『此津八圓亀爾續きて繁昌の地なり原来波塘の構よく入船の便利よきが故に湊に泊る船夥しく濱辺尔八船宿旅籠屋建てつづき或八岸尔上酒煮賣の出店温飩蕎麦の擔賣甘酒餅菓子など商ふ者往来たゆる更なく其<sup>その</sup>余諸商人舟大工等ありて平常賑わし且又西國筋往返の諸船の内金毘羅参詣なさんとす徒<sup>ともがら</sup>ハ此に着船して善通寺を拝し象頭山尔登る其都合よきを以て此尔船を待せ参詣するもの多し』(訳：この港は丸亀港に続いて繁盛した場所です。堤の構え方がもともとからよいため、入港しやすく、港の中にはたくさんの船が停泊しています。浜辺には船宿や旅籠が

建ち並んでそのため丸亀に並んで繁盛しています。岸辺には酒や煮売、うどんや蕎麦を、甘酒や餅菓子の販売などが絶える事はありません。そのほかの商人や船大工などでも常に賑やかです。また西廻り航路を行き来する船のなかで金毘羅参りをする人たちは、ここに着船して、善通寺を拝みながら象頭山を上る際に都合のよい多度津港に船を待たせて参詣する人が多いです。)と記しています。

同じ讃岐国のなかでも高松藩の高松港・丸亀藩の丸亀港に並ぶほどの港として栄えました。特に西廻航路の寄港地として、廻船業に従事した商人たちが台頭し、港に接続する桜川の河口には交易品を納める海鼠塀の蔵が、本通の町並みには町屋形式の住宅が建ち並んでいました。これらの蔵や住宅のいくつかは現存しています。廻船業に従事した商人の中で特に大成した7家(武田家3家、塩田家2家、合田家、景山家)は多度津七福神と呼ばれるようになります。彼らの資金によって明治維新以降の近代化も四国内では先行して行われました。

また北前船の寄港地である事、さらに琴平との接続の便利さから、文化文政期(1804～1829年)や天保期(1830～1844年)などの江戸時代後期(18世紀後半～)に多度津を起点とした金毘羅参りが盛んになります。金毘羅参りのための街道も廻船業で財を成した商人たちによって整備され、「多度津金毘羅街道」と称されるようになります。この街道は参拝者の多くが、北前船航路を利用したルートに沿って北日本、山陰、九州、広島などから船で多度津港に入り、そこからの金毘羅参りとなります。港には参拝客向けの旅館や商店が並び、街道の道沿いには道標や常夜燈である金毘羅燈籠などの関連する石造物がいくつも設置されました。特に燈籠や鳥居には様々な地からの参拝者の名前が連なり、雲州(島根県)や防州(山口県)、芸州(広島県)や予州などの寄進者が刻銘されています。現在も残るこれらの遺物が、当時の街道の様子を思い起こさせます。



本通の町並み

合田家住宅



高見八幡宮奉納模型和船



多度津港の痕跡(明治時代)



金毘羅燈籠